第３回日本ジオパーク全国大会（室戸大会）への参加状況

■全体

区分	内訳	参加者数
参加登録者		498
来賓	高知県知事、高知県議会副議長等	23
市町村	近隣市町村長、室戸市議会議員	24
発表者	基調講演者、分科会コーディネーター等	11
出演者(アトラクション、吹奏楽等)	土佐室戸勇魚太鼓、佐喜浜子どもにわか、鯨舟唄等	110
報道関係者	テレビ・新聞社等	28

■参加登録者内訳

	地　域	参加者数
会員	アポイ岳	3
	洞爺湖有珠山	16
	糸魚川	21
	南アルプス	3
	山陰海岸	50
	室戸	23
	島原半島	25
	恐竜渓谷ふくい勝山	4
	隠岐	11
	阿蘇	22
	天草御所浦	4
	白滝	8
	伊豆大島	2
	霧島	9
	男鹿半島・大潟	17
	磐梯山	8
	茨城県北	7
	下仁田	3
	秩父	3
	白山手取川	7
	ゆざわ	15
	八峰白神	8
	銚子	4
	箱根	8
	伊豆半島	12

	地　域	参加者数
準会員	三笠市	2
	鹿追町	2
	いわて三陸	9
	栗原市	8
	佐渡	9
	美祢市	6
	四国西予・黒瀬川	52
	仁淀川・四国カルスト	17
	おおいた豊後大野	8
	おおいた姫島	6
	桜島・錦江湾	2
	三島村	3
	本部半島	9

		参加者数
その他	静岡県立松崎高校	1
	広島大学	10
	八戸工業大学	1
	鳥取環境大学	1
	長崎大学	1
	協賛会員	11
	大分県	2
	和歌山県	3
	北海道中頓別町	2
	その他（一般参加者等）	40

■日程・プログラム別

日程・プログラム			参加者数
11/2(金)	プレジオツアー	Aコース「大地の誕生コース」	117
	ＪＧＮ事業	事前相談会（ＪＧＮ）	49
		事前相談会（ＧＧＮ）	9
		理事会	25
	食事会	食事会	165
11/3(土)	分科会	①「保護と活用」	57
		②「高校生セッション」	63
		③「ジオパークと地域住民との関わり」	85
		④「ストーリー作りと表現法」	75
		⑤「ジオパークを活用したビジネス」	60
	交流会	交流会	323
11/4(日)	分科会	①「保護と活用」	39
		②「高校生セッション」	61
		③「ジオパークと地域住民との関わり」	62
		④「ストーリー作りと表現法」	53
		⑤「ジオパークを活用したビジネス」	53
11/5(月)	ジオツアー	Bコース「大地の恵みコース」	15
		Cコース「大地と海の恵みコース」	39
		Dコース「大地の誕生コース」	69
		Eコース「大地の躍動コース」	39

大会を終えて

平成24年11月２日から５日の４日間、室戸市において開催いたしました第３回日本ジオパーク全国大会（室戸大会）に、ご支援・ご参加をいただきまして、誠にありがとうございました。

全国から大会期間中のべ２，２００人の方々に室戸ジオパークを楽しんでいただき、好評のうちに終えることができました。

「人と地球の心地よい関係のために」を大会テーマに、ジオパークの理念であります“持続的な発展”について講演会や分科会、シンポジウムなどのプログラムを実施し、関係者のつながりや議論を深めることができました。特に、初めての取り組みとして、高校生セッションを開催することができましたことは、今後のジオパーク活動の推進につながるものと期待しております。

結びとなりますが、本大会を開催するにあたり、全国からお客さまをお迎えするための清掃活動や事前の準備、大会当日の運営ボランティアなどにご支援・ご協力をいただきました大会実行委員会の皆さま方を始め多くの市民の方々に心から感謝と御礼を申し上げます。

第３回日本ジオパーク室戸大会実行委員会
委員長　小松 幹侍

第3回日本ジオパーク室戸大会実行委員会
〒781-7185 高知県室戸市浮津25番地1　室戸市役所内
TEL：0887-22-5161　FAX：0887-22-1120
E-Mail：mr-010300@city.muroto.lg.jp
ホームページ http://conference.muroto-geo.jp/

人と地球の
心地よい
関係のために

第3回 日本ジオパーク全国大会（室戸大会）

報告書

2012年
11/2(金)・3(土祝)・4(日)・5(月)

●メイン会場：室戸市保健福祉センターやすらぎ

第3回 日本ジオパーク全国大会（室戸大会）｜開 催 概 要｜

- 名　　称　第3回日本ジオパーク全国大会（室戸大会）
- 会　　期　平成24（2012）年11月2日（金）・3日（土・祝）・4日（日）・5日（月）
- 主　　催　第３回日本ジオパーク室戸大会実行委員会・財団法人自治総合センター
- 共　　催　日本ジオパークネットワーク・日本ジオパーク委員会・室戸市
- 後　　援　総務省・経済産業省・文部科学省・環境省・外務省・気象庁・観光庁・高知県・高知県教育委員会・室戸市教育委員会・日本地質学会・日本ユネスコ国内委員会・独立行政法人産業技術総合研究所・独立行政法人海洋研究開発機構・高知大学・高知工科大学・高知新聞社・RKC高知放送・ＫＵＴＶテレビ高知・ＫＳＳさんさんテレビ・ＮＨＫ高知放送局・エフエム高知・エフビットコミュニケーションズ株式会社
- 事　務　局　第3回日本ジオパーク室戸大会実行委員会　事務局　（室戸市役所ジオパーク推進課）
  〒781-7185　高知県室戸市浮津25-1　ＴＥＬ：0887-22-5161　ＦＡＸ：0887-22-1120
  Ｅ－ｍａｉｌ：mr-010300@city.muroto.lg.jp
- ＭＡＩＮ会場　室戸市保健福祉センターやすらぎ
- JGN事前相談会会場　室戸市役所　2F 会議室
- GGN事前相談会会場　室戸市役所　4F 会議室
- ＪＧＮ理事会会場　室戸市役所　2F 会議室
- 食事会会場　室戸水産会館
- 交流会会場　室戸市勤労者体育センター
- 分科会会場①　室戸市役所　第1会議室
- 分科会会場②　室戸高等学校　視聴覚室
- 分科会会場③　室戸小学校　体育館
- 分科会会場④　室戸高等学校　体育館
- 分科会会場⑤　室戸高等学校　多目的ホール

大会組織名簿

役職	氏名		専門部会
名誉委員長	尾崎　正直	高知県知事	
名誉副委員長	尾池　和夫	日本ジオパーク委員会委員長	
同	米田　徹	日本ジオパークネットワーク理事長	
同	平　朝彦	室戸ジオパーク推進協議会名誉会長	
アドバイザー	吉倉　紳一	室戸ジオパーク推進協議会顧問	
同	木下　正高	同	
同	村山　雅史	同	
同	弘田　兼一	同	
同	木村　良	同	
委員長	小松　幹侍	室戸市長	
副委員長	植田 壮一郎	室戸ジオパーク推進協議会理事	
監事	畠中　秀友	室戸市社会福祉協議会会長	
同	平本　博実	室戸ジオパーク推進協議会会員	
委員	山下　福恵	室戸ジオパーク推進協議会理事	おもてなし部会長
同	中野　金夫	室戸市シルバー人材センター理事長	おもてなし副部会長
同	山川　恵子	室戸市連合婦人会会長	おもてなし部会
同	植村 みつ子	室戸市健康づくり婦人会会長	同
同	八木　正人	室戸市商工会会長	同
同	久保 由起成	室戸市商工会事務局長	同
同	林　竹松	室戸市議会議長	同
同	樽本　善一	室戸ジオパーク推進協議会会員	同
同	原田　美和	ＪＡ土佐あき室戸支所長	同
同	細松　隆宏	ＪＡ土佐あき吉良川支所長	同
同	山岡　丈二	高知県漁業協同組合室戸岬統括支所長	同
同	竹中　浩貢	室戸ジオパーク推進協議会理事	同
同	久武　健二	高知県観光振興部地域観光課長	同
同	北村　和彦	室戸市民生・児童委員協議会会長	同
同	山内　雅史	室戸ジオパーク推進協議会会員	同

役職	氏名		専門部会
同	山村　邦夫	室戸ジオパーク推進協議会会員	同
同	米澤　善吾	室戸市議会副議長	宿泊・交通部会長
同	富岡　一成	前・室戸ライオンズクラブ会長	宿泊・交通副部会長
同	森園　忠勝	国立室戸青少年自然の家所長	宿泊・交通部会
同	島田　郁子	室戸ジオパーク推進協議会会員	同
同	徳増　和也	室戸ジオパーク推進協議会理事	同
同	植村　幸治	室戸ジオパーク推進協議会会員	同
同	河上　倫子	室戸市観光協会事務局長	同
同	池田 稔比古	東和観光	同
同	千代岡 幸弘	吉良川観光	同
同	中畠　益男	高知県産業振興推進部地域づくり支援課地域支援企画員（総括）	同
同	岩川　浩	室戸ジオパーク推進協議会会員	同
同	野町　裕	県立室戸高等学校長	教育部会長
同	谷村　正昭	室戸市立小中学校長会会長	教育部会
同	中屋　秀志	室戸ジオパーク推進協議会会員	同
同	石建　結香	私立園長会会長	同
同	中岡　美佐	公立園長会会長	同
同	升井　俊六	室戸ジオパーク推進協議会会員	ジオツアー部会長
同	坂井　智空	室戸ジオパーク推進協議会理事	ジオツアー副部会長
同	木下　恵介	室戸市副市長	ジオツアー部会
同	島田　信雄	室戸市観光協会会長	同
同	海老川 真美	吉良川町並み保存会	同
同	田村　拓	室戸ジオパーク推進協議会理事	同
同	宇賀　俊六	室戸ジオパーク推進協議会会員	同
同	青木　準吉	室戸市常会長連合会会長	同
同	植野 真由美	室戸ジオパーク推進協議会副会長	同
同	堺　喜久美	室戸ジオパーク推進協議会会員	同
同	竹中　幸市	同	同

プログラム

11月2日（金）

10:00～12:00
- □**JGN事前相談会**　【会場】室戸市役所　2F会議室
- □**GGN事前相談会**　【会場】室戸市役所　4F会議室

13:00～15:30
- □**ＪＧＮ理事会**　【会場】室戸市役所　2F会議室
- □**プレジオツアー**　【見学地】室戸岬サイト

16:00～19:00
- □**開会セレモニー**　【会場】メイン会場　室戸市保健福祉センターやすらぎ　夢ひろば
  - ・アトラクション（土佐室戸勇魚太鼓）
  - ・主催者挨拶
    実行委員会委員長（室戸市長）　小松 幹侍氏
    日本ジオパークネットワーク理事長（糸魚川市長）　米田 徹氏
  - ・来賓挨拶
    高知県知事（実行委員会名誉委員長）　尾崎 正直氏
    日本ジオパーク委員会委員長（実行委員会名誉副委員長）　尾池 和夫氏
  - ・ＪＧＮ認定式
  - ・**基調講演**
    「室戸から発信する新しい地球観」
    講師：独立行政法人海洋研究開発機構理事長　平 朝彦氏
  - ・フォトコンテスト表彰式

19:30～21:00
- □**食事会**　【会場】室戸水産会館

11月3日（土・祝）

8:30～10:30
- □**基調講演**　【会場】メイン会場　室戸市保健福祉センターやすらぎ　夢ひろば
  「ジオパークのあゆみ」
  講師：産業技術総合研究所地質標本館企画運営グループ長　渡辺 真人氏
  「自然と地域社会の心地よい関係のために」
  講師：北海道大学大学院文学研究科教授　宮内 泰介氏

10:45～12:30
- □**バーチャルジオパーク**　【会場】メイン会場　室戸市保健福祉センターやすらぎ　夢ひろば

11:00～13:10
- □**昼食**　【会場】メイン会場　室戸市保健福祉センターやすらぎ

13:30～16:30
- □**分科会❶～❺**

17:30～18:30
- □**ポスター発表コアタイム**
  【会場】メイン会場　室戸市保健福祉センターやすらぎ　きらきらひろば

19:30～21:00
- □**交流会**　【会場】室戸市勤労者体育センター

11月4日（日）

9:00～11:30
- □**分科会❶～❺**

11:30～12:30
- □**昼食**

13:30～17:20
- □**シンポジウム**　【会場】メイン会場　室戸市保健福祉センターやすらぎ　夢ひろば
  テーマ：「人と地球の心地よい関係のために」
  - ・アトラクション（吹奏楽演奏）　・日本ジオパーク高校生宣言
  - ・パネルディスカッション（分科会をふまえての総合討論）
    ［コーディネイター］　**目代 邦康氏（公益財団法人自然保護助成基金主任研究員）**
    パネラー
    - 分科会❶コーディネイター　**淺野 敏久氏（広島大学大学院総合科学研究科准教授）**
    - 分科会❷コーディネイター　**中川 和之氏（時事通信社山形支局長）**
    - 分科会❸コーディネイター　**宮内 泰介氏（北海道大学大学院文学研究科教授）**
    - 分科会❹コーディネイター　**迫田 司氏（サコダデザイン代表取締役）**
    - 分科会❺コーディネイター　**今井 ひろこ氏（特定非営利活動法人たじま海の学校 副代表）**
  - **基調講演「日本のジオパークの特徴とこれから」**
    講師：東京大学地震研究所 教授　中田 節也氏
  - ・大会宣言　**実行委員会委員長（室戸市長）　小松 幹侍氏**
  - ・次回全国大会開催地ＰＲ

17:30～
- □**JGC・JGNへの質問コーナー**　【会場】メイン会場　室戸市保健福祉センターやすらぎ　夢ひろば

11月5日（月）

●ジオツアー

大地の恵みコース	**8:30発**
大地と海の恵みコース	**8:30発**
大地の誕生コース	**9:00発**
大地の躍動コース	**9:00発**

3日、4日両日開催プログラム

9：30～17：00
- □**ポスター展示**
  【会場】メイン会場
  室戸市保健福祉センターやすらぎ
  きらきらひろば

9:30～17:00
- □**全国ジオパーク特設ブース**
  【会場】メイン会場
  室戸市保健福祉センターやすらぎ
  きらきらひろば

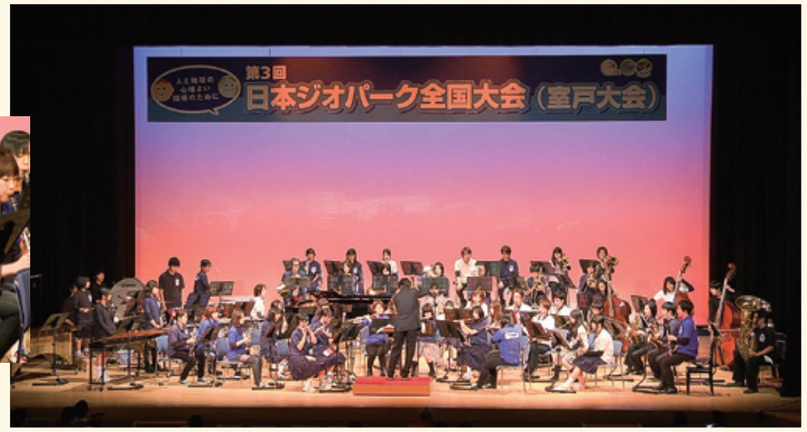
9:30～17:00
- □**協賛展示ブース**
  【会場】メイン会場
  室戸市保健福祉センターやすらぎ
  ロビー

10:00～16:00
- □**物産展**
  【会場】メイン会場
  室戸市保健福祉センターやすらぎ
  玄関前駐車場

9:00～18:30
- □**ミーティングルーム**
  【会場】メイン会場
  室戸市保健福祉センターやすらぎ
  第1・第2・第3会議室

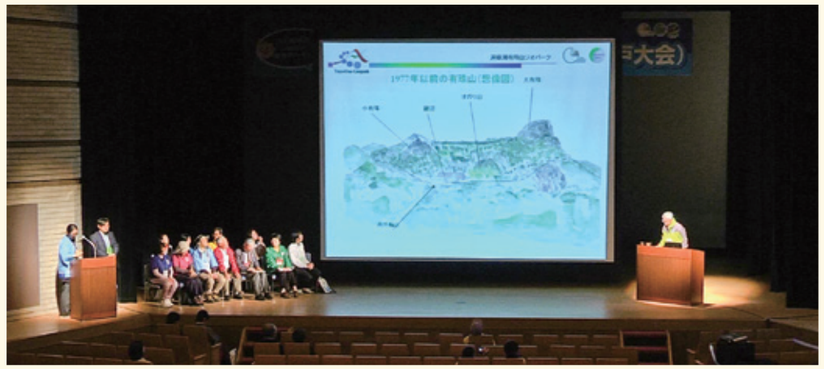
▼アトラクション

鯨文化を伝える土佐室戸勇魚太鼓



大会に合わせて作曲したオリジナル曲を演奏する室戸吹奏楽団

▼バーチャルジオパーク



現地に行って実際にガイドツアーを受けている気分になれるバーチャルジオパークが開催されました。
紙芝居やダンスを交え、見えない地質学的な現象を観光客に分かりやすく伝える各地のガイドさんの工夫が見られました。

バーチャルジオパークの出演者

- **下仁田ジオパーク**
  （下仁田町ジオパーク推進室　関谷 友彦）
- **糸魚川ジオパーク**
  （糸魚川ジオパーク観光ガイド　久保 雄、中村 栄美子）
- **霧島ジオパーク**
  （霧島ネイチャーガイド　古園 俊男）
- **山陰海岸ジオパーク**
  （神鍋ジオガイド　前田 敦司）
- **室戸ジオパーク**
  （室戸市観光ガイドの会　和田 美紗子、堺 喜久美）
- **隠岐ジオパーク**
  （隠岐ジオパーク推進協議会事務局　野辺 一寛）
- **八峰白神ジオパーク**
  （八峰白神ジオパーク学習支援部会　秋元 裕子、阿部 奈々子）
- **茨城県北ジオパーク**
  （茨城県北ジオパーク　鹿田 次人）
- **洞爺湖有珠山ジオパーク**
  （洞爺湖有珠火山マイスター　池田 武史）

▼事前相談会

JGN・GGN加盟に向けた各地の取り組みに関する質疑応答が
実施されました。

▼JGN理事会

次回の全国大会の開催地が隠岐ジオパークに決定しました。

▼食事会・交流会

食事会・交流会では、飲食店はもちろん婦人会などの地域団体が協力して、室戸の地場産品を用いた料理が出されました。
また、室戸に古くから伝わる踊りの披露も行われました。

▼鯨舟唄（室戸小学校）

室戸市室津地区に伝わる伝統芸能である鯨舟唄を
室戸小学校の児童が披露しました。
室戸小学校では、毎年この伝統芸能を
古くより捕鯨によって栄えた室戸の地域学習の一環として学んでいます。

▼佐喜浜子どもにわか

室戸市佐喜浜地区では、毎年10月の神祭（秋祭）の中で、
社会風刺をする俄（にわか）芝居が奉納されています。
本来は成人が演じるのですが、
今回は子ども達が行う俄（にわか）が演じられました。

◀キャラクター大集合

各地のジオパークからジオキャラが大集合しました。
室戸ジオパークの“まがり博士”も本大会で初登場となりました。

プレジオツアー（11月2日 13時～15時30分）

【Aコース：大地の誕生コース】

テーマ：大地の誕生最前線である室戸岬の遊歩道をガイドさんと一緒に散策するツアー

見学地：室戸岬遊歩道（室戸岬サイト）

コース案内人：島田信雄、細川季代、浅川幸子、堺喜久美、北村久子、浜吉八重、海老川真美、山村恵美、安岡一成、井上厚、植野真由美、高原望、山路洋、門田坦、大西政昭、橋本章治、五島由理、西村章三郎、山川興子、山本貴美子、橋本照子、山下民、高原和子、竹村美阿、平本一也、谷岡壽満子、堺福美

参加者：117名

概要：室戸岬に行くまでのバス車内では、ガイドさんによる室戸ジオパークや大地の成り立ちの説明、各ジオサイトの紹介などが行われました。
遊歩道では、各グループに分かれて、タービダイト層や大地の隆起、亜熱帯植物群、マグマの貫入などの各見所のガイドを受けました。室戸岬遊歩道の散策途中には、ガイドさんたちによる休憩所（カフェ）が開店し、お茶等が参加者に振る舞われました。

行水の池では、
大地の隆起の説明がありました。

遊歩道の途中で
干し芋やお茶等、
室戸の恵みを使った
お接待を
受けました。

ジオツアー（11月5日 8時30分～12時）

【Bコース：大地の恵みコース】

テーマ：変動する大地の上で暮らす人々の文化・歴史をとおして、大地の恵みを体感するツアー

見学地：西山台地（枦山・西山台地サイト）、吉良川のまちなみ及び炭窯（吉良川まちなみサイト）、楽市（キラメッセ室戸サイト）

コース案内人：海老川真美、村山雅史、柚洞一央 、澤野啓助、細松隆宏、山本土佐男、宮川真吾、宇賀俊六、吉良川小学校6年生、青木準吉、島巻努、細木和、細木敏美、角田佳資、黒岩征四郎、黒岩辰徳、近森雄一、川田勇、冨岡純

参加者：15名

概要：各見所に行くまでのバスの車内では、室戸ジオパークの成り立ちや室戸の歴史・文化についての説明がありました。西山台地では、海成段丘の上で栽培されている農作物（サツマイモ）の説明と収穫体験を行いました。吉良川のまちなみでは、地元の吉良川小学生によるまちなみの説明がありました。また、室戸を支えた産業の一つである土佐備長炭の炭窯に行き、窯出し体験を行いました。ツアーの最後には、室戸の大地の恵みがそろうキラメッセ室戸での買い物を楽しんでもらいました。

土佐備長炭の炭窯では、
窯出し体験を行いました。

吉良川のまちなみでは、
吉良川小学校の
児童による説明がありました。

ジオツアー（11月5日 8時30分～12時）

【Cコース：大地と海の恵みコース】

テーマ：大地と海が作り出した恵み、海洋深層水。それを利用した産業や生態系とのつながりに触れるツアー

見学地：高岡漁港・アクアファーム・室戸海洋深層水（株）・赤穂化成（株）（海洋深層水サイト）、室戸岬クルージング（室戸岬サイト）

コース案内人：竹中真智子、升井俊六、殿谷梓、小笠原利幸、菅原拓也、蜂谷潤、津嶋貴弘、堺宗大、島村泰吉、濱田竹央

参加者：39名

概要：各見所に行くまでのバスの車内では、室戸ジオパークの成り立ちや室戸の海の産業や歴史の説明がありました。高岡漁港では、室戸の東海岸の説明や定置網漁（大敷き網）により水揚げされたばかりの魚を見学してもらいました。また、海洋深層水を利用したスジアオノリの養殖や、海洋深層水の排水を利用して育てられた海藻を利用してアワビの養殖を行っていることについての説明がありました。アクアファームでは、海洋深層水が室戸の東海岸で取水できる仕組みについての説明がありました。海洋深層水を利用している例として工場を見学したあと、海上から室戸の大地を望むクルージングを行いました。

船にのり、室戸の沖から
室戸の大地の成り立ちの説明を受け
室戸の海の荒々しさを肌で体験しました。

高岡漁港では、
室戸の東海岸の
地形や潮流の話をはじめ
獲れる魚の説明が
ありました。

ジオツアー（11月5日 9時～12時）

【Dコース：大地の誕生コース】

テーマ：大地の誕生最前線である室戸半島の先端で、展望台と遊歩道をガイドさんと一緒に散策するツアー

見学地：津呂山展望台（室戸スカイラインサイト）、室戸岬遊歩道（室戸岬サイト）

コース案内人：島田信雄、田尻敦子、和田美紗子、植野真由美、細川季代、井上厚、堺喜久美、橋本章治、浅川幸子、五島由理、西村章三郎、浜吉八重、高原望、北村久子、山村恵美、山川興子、山本貴美子、橋本照子、山下民、高原和子、竹村美阿、平本一也、谷岡壽満子、堺福美

参加者：69名

概要：津呂山展望台や室戸岬に行くまでのバス車内では、ガイドさんによる室戸ジオパークや大地の成り立ちの説明、各ジオサイトの紹介などが行われました。津呂山展望台では、室戸半島の先端から室戸の西海岸と東海岸の特徴的な地形を見学し、室戸の成り立ちに関する説明が行われました。室戸岬遊歩道では、各グループに分かれて、タービダイト層や大地の隆起、亜熱帯植物群、マグマの貫入などの各見所のガイドを受けました。室戸岬遊歩道の散策途中では、ガイドさんたちによる休憩所（カフェ）が開店し、お茶等が参加者に振る舞われました。

海底にあった地層が、
何故室戸の大地で見ることができるのか？
という説明を受けました。

津呂山展望台では、
室戸の大地の
成り立ちを知り、
特徴的な地形を
眺望しました。

ジオツアー（11月5日 9時～12時）

【Eコース：大地の躍動コース】

テーマ：台風・地震の痕跡等、室戸で起きてきた災害をとおして、大地の躍動を感じるツアー

見学地：楽市及び鯨館（キラメッセ室戸サイト）、新村遊歩道（行当・黒耳海岸サイト）、津呂港（とろむサイト）、高岡地区（海洋深層水サイト）

コース案内人：山路洋、田村拓、坂井智空、吉倉伸一、柴田伊廣、山本愛、久保美紀、出間正吾、多田運

参加者：39名

概要：キラメッセ室戸に行くまでのバスの車内では、室戸の歴史・文化の説明及び室戸ジオパークの各サイトに関する紹介がありました。キラメッセ室戸サイトでは、室戸ジオパークビジターセンターで室戸の大地の成り立ちについての説明があり、また、鯨の資料館では室戸で栄えた捕鯨に関する紹介がありました。新村遊歩道では、隆起して大地となった地層をとおして昔海底だった様子と、プレート運動の躍動さを感じてもらいました。津呂港では、室戸を襲った災害（台風や地震）に関する説明が行われました。高岡地区では、自然の脅威がもたらされる地で暮らしてきた室戸の人々の工夫を見学しました。

室戸で昔栄えた捕鯨や、
今も残る鯨文化の説明を受けました。

室戸の大地をもたらす
きっかけとなった
プレート運動や、
それにより引き起こされる災害、
そして災害を乗り越えてきた人々の
歴史や生活の様子を見学しました。

開会セレモニー

日時11月2日（金）16:00〜19:00　**会場**メイン会場　室戸市保健福祉センターやすらぎ 夢ひろば

アトラクション（土佐室戸勇魚太鼓）

主催者挨拶

第3回日本ジオパーク室戸大会実行委員会　委員長
室戸市長　小松 幹侍

本日は、第3回日本ジオパーク全国大会室戸大会に全国からたくさんの方々にお集まり頂き、心から歓迎申し上げます。

また、ご多用の中、尾﨑知事はじめたくさんのご来賓の皆様、海外からは済州島ジオパーク、ランカウイジオパークからもご参加頂き、感謝と御礼を申し上げる次第です。

室戸ジオパークの活動に対して、日頃からご支援を頂いております海洋研究開発機構の平先生、日本ジオパーク委員会委員長の尾池先生始め、ご指導を頂いております皆様にも心から御礼申し上げます。

室戸ジオパークは平成20年6月、室戸ジオパーク推進協議会を立ち上げ活動を始め、昨年9月、ノルウェーの国際大会で、世界認定を頂きました。室戸ジオパークの特徴は、地球のプレートの動きと地震によって大地が生まれる最前線であるということですが、その資源は「人」であると考えます。私どもとしては、この活動を子どもたちの教育や、防災の町づくり、地域経済の持続的発展につなげたい、そして、人をつないでいく町づくりにつなげなければならないと考えています。

本大会は「人と地球の心地よい関係のために」をテーマにしています。各地の取り組みや課題を議論頂き、次の活動につながるものにしたいと考えています。

本大会の開催にあたりご尽力頂きました関係機関、関係団体、ボランティアの皆様に御礼申し上げますと共に、日本ジオパークネットワーク及び各地域のますますの発展、ご参加の皆様のますますのご活躍を祈念いたします。

日本ジオパークネットワーク理事長
糸魚川市長　米田 徹

第3回日本ジオパーク全国大会室戸大会がこのように盛大に開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

去る9月24日に、新たに5地域の日本ジオパークが誕生しました。大変喜ばしいことであり、関係地域の皆様に心よりお喜び申し上げます。

2007年にジオパークを目指す13地域で日本ジオパーク連絡協議会を立ち上げて以来、2009年には日本ジオパークネットワークを設立、翌年にはNPO法人化し、全国に呼びかけてまいりました。現在では、日本ジオパークが25地域、ジオパークに取り組む準会員が15地域を数え、活動が大きい輪となって広がっています。これも、日本ジオパーク委員会の尾池委員長はじめ委員の皆様、産業技術総合研究所や関係の皆様のご協力に敬意を表し、感謝を申し上げます。

我々日本ジオパークネットワークのメンバーは、皆様と一丸となりこれからもジオパークの普及と活性化に取り組んで参ります。今後は、地域のブランド価値を自ら高め、日本全体で広げていく必要があります。そのためには、情報発信や持続可能な地域振興が重要です。こうして、全国大会で地域の情報交換や交流を深めることは大変有意義なことです。特に、今回の室戸大会では、初めて高校生セッションが行われるなど、教育的な絆によるネットワークが全国発信につながるものだと捉えています。ジオパーク普及拡大にお力添えを賜りたいと考えます。

最後に、尾﨑名誉委員長、室戸市長の小松実行委員会委員長はじめ、実行委員会の皆様に本大会の開催にあたり多大なるご尽力を賜りましたことに感謝を申し上げると共に、本大会が有意義で盛大に開催されることをお祈り申し上げ、ご来場の皆様のご多幸、ご活躍をご祈念申し上げます。

来賓挨拶

高知県知事　尾﨑 正直氏

本日、全国各地から多くの皆様ご臨席の下、第3回日本ジオパーク全国大会がこの室戸の地で開催されますことを心より感謝申し上げます。また、開催地の県知事として、全国各地からお越し頂きました皆様を心より歓迎いたします。

室戸ジオパークは昨年9月、世界ジオパークの認定を頂きました。これは、高知県民にとっても久方ぶりの慶事でした。世界認定までの道のりは決して平坦ではなく、一度は世界ジオパークへの挑戦ををあきらめたこともありました。しかし、多くのみなさんが改めて団結を確認し、本日おいでの尾池先生、平先生をはじめとする全国の有識者の先生方にご指導を頂き、室戸市民が大きな盛り上がりを見せ、世界認定審査の際には沿道で審査員を出迎えるなど市民全体で審査に臨み、「室戸ジオパークの宝は人である」につながったと思います。

ジオパークは、いかに地域の活性化・文化振興につなげていくかが重要だと思います。室戸ジオパークでは、多くの市民の皆さんがガイドの技術を身につけるなどの努力をされて、ガイドツアー利用者が前年比の約7倍になるなど、観光客が大幅に増加しているところでありますが、高知県全体を挙げて活性化の努力をさらに重ねていきたいと考えています。

この全国大会では全国のジオパーク関係者で意見交換をし合い、新しい知恵を活かし合う、そういう関係を築いていくことが大きな目的だと思います。さらに今回は、海外の世界ジオパークから、韓国の済州島ジオパーク、マレーシアのランカウイジオパークの方々にもご参加いただいており、日本ジオパークネットワークのこれまでの取り組みに新たな協力の輪ができると期待しています。

3回目の全国大会をこの高知県の室戸ジオパークで開催できましたことに対し、米田理事長をはじめ、日本ジオパークネットワークの皆様に心より御礼を申し上げますと共に、開催にあたり多大なるご尽力を頂いた室戸市長はじめ地元の皆様、関係団体の皆様に感謝を申し上げます。

日本ジオパーク委員会委員長
尾池 和夫氏

第3回日本ジオパーク全国大会にあたり、日本ジオパーク委員会を代表して、お祝い申し上げます。

「大地を学ぶ公園」として、ジオパークはこの4年間で発展し、今大会で認定証を受けられる5カ所を含め25カ所の日本ジオパークが誕生しています。その中で、今回たくさんの方々が集まるこの室戸ジオパークを含む5カ所が現在、世界ジオパークネットワークに加盟しています。

皆様方の熱心な活動により、「ジオパーク」という言葉が一部の国語辞典にも掲載されるなど、日本に定着しつつあります。日本ジオパークネットワークの活動によって、地球のことを真剣に学び、地球を理解し、地球環境を考え、地球から賜る恩恵に感謝して暮らす人々が次の世代にますます増えることを私は望みます。この日本列島に生まれ育った人々が、変動帯の特徴を理解して、災害に強い暮らしの知恵を学び伝えるためにも、ジオパークの「見る」「学ぶ」「食べる」役割を大いに活用してほしいと願っています。

今回参加される準会員の方々にも、大地を活用する仕組みを地域の人々が整備して、多くの優れたジオパークをこの日本列島に生み出して欲しいと期待して、今日のお祝いのご挨拶といたします。

JGN認定式

平成24年9月24日認定の5地域へ、日本ジオパーク委員会 尾池和夫委員長より認定証が授与されました。

[尾池和夫委員長よりメッセージ]

今回認定されました5つの地域の方々に日本ジオパーク委員会を代表して心からお祝いと、それぞれの地域の関係者の方々の努力に敬意を表し、お礼を申し上げます。5つの地域にはそれぞれの個性と特徴があります。その特徴を活かしながら他の20ヶ所の日本ジオパーク、5ヶ所の国内の世界ジオパークと連結し、大きく発展していただきたいと思います。ジオパークは地域の持続的な発展に貢献するものです。大地の恵みを活用しながら貴重な遺産として守り、後世に伝えていくことが大切であり、大地の仕組みを深く理解してその恩恵と人の生活や文化との関連を知る場所であります。地元の方々が自らの学習を深めながら、正しい知識を分かりやすく伝えるガイドとなって、世界の人々に伝えていくとともに全体としてのジオパークの運動そのものの発展にも貢献していただくようにお願いします。そのためにも特にジオパーク相互間の交流にも努力し、多くの他のジオパークにも訪れて、尾﨑知事が提案したようにバイラテラルからマルチラテラルの交流によって、積極的に経験を学んでいただくよう改めてお願いして私のお祝いの言葉とさせていただきます。

新規認定地域

ゆざわジオパーク

箱根ジオパーク

八峰白神ジオパーク

銚子ジオパーク

伊豆半島ジオパーク

[新規認定地域代表挨拶]
箱根ジオパーク推進協議会会長　箱根町長　山口 昇士氏

5地域を代表し一言挨拶を申し上げます。ただいま我々5地域の代表者に認定証が授与されました。この栄誉を大変うれしく受け止めるとともに、今後もさらなるジオパークの発展に貢献していかなくてはならないという責任を、痛切に感じております。ジオパークの活動は地形や地質といった学術的要素だけではなく、地域の成り立ち、歴史、文化、伝統、植生、特産品など、郷土を知り、郷土を保全し発展させていく意識を高めるうえで、有効な手段であると考えております。今回認定された5地域のジオパークでもそれぞれ特徴のあるテーマを持っており、大地の成り立ちと人間活動との関わりを楽しく学ぶことができるジオパークです。

ここ数年日本を襲った災害により自然災害への関心が高まっております。ジオパークは自然災害も含む地球の記憶を記録している場所でもあります。ジオパークと防災、教育分野の連携はこれから重要なものとなり、我々ジオパークに期待される役割も大きくなってくると思います。またジオパークは観光や地域振興の面でも五感で体感できるストーリー作りを展開することで、これまでの観光に深みや奥行きを持たせ、楽しいだけでなく何度来ても発見がある観光地を作ることが出来ると信じております。観光という言葉はその地域の光を見るということに由来しているそうです。ジオパークはまさに地域の新たな光となると考えております。本日の認定は我々のジオパークにとってスタートであり、すでにある20地域のジオパークと連携しながら、日本におけるジオパークの普及・啓発に努め、それぞれの地域の特色を活かした個性あふれるジオパークを作り上げていくことが重要です。我々は今後もジオパークの理念に恥じることのない活動を継続して実施していく所存であります。今後とも皆様のご指導ご鞭撻をよろしくお願いをいたします。最後になりますが、この認定にあたり大変お世話になりました皆様に心から感謝を申し上げ、お礼の挨拶とさせていただきます。

■11月2日（金）

「室戸から発信する新しい地球観」

講師：独立行政法人海洋研究開発機構理事長　平　朝彦氏

地球表層は十数枚のプレート（岩板）に分かれているが、プレートの沈み込み帯（海溝）で何が起きているのか、長い間、分からなかった。室戸ジオパークの地質は、その沈み込み帯で起きる諸現象を陸上で確認できる宝庫だ。

赤道付近から約3千キロ移動してきた枕状溶岩やチャート（海の放散虫などが沈積した岩）が、室戸を含む四国南部の「四万十帯」と呼ばれる地層に見られる。これらが、プレートが移動することを地質学的に裏付けた。

海溝にプレートが沈み込む際、何千キロも移動してきたプレート上の物質と、海溝にたまっている泥や砂が一緒になって、日本列島側に付け加わる。これを「付加体」と呼ぶ。四万十帯は付加体でできている。

また、室戸岬は海岸の隆起によって形成されてきた。付加体、四万十帯が地震などで今も隆起していることを実感できる。

プレート沈み込み帯である室戸沖の溝、南海トラフは、たどっていくと静岡県の富士川の河口に出る。そこには大きな砂の三角州があり、南海トラフにたまっている砂は全て、ここから南海トラフを伝って室戸沖にも運搬されてきている。

付加体が次々に加わり、年輪のように成長してきたのが日本列島だ。陸上の火山などを除き、陸地は基本的に付加体でできている。プレートが沈み込む際に、一緒に沈み込めなかった砂や泥、一部の物質が寄り集まって陸地を造る。室戸はそれが観察できる場所であり、沖合では現在も付加体の形成が続いている。

今夏、東北沖の海底を掘削した。割れ目が四万十帯の混在岩と全く同じだと思った。四万十帯の研究を見直すことで、巨大地震発生のメカニズムや防災のヒントを得られるのではないか。

付加体の形成は地震、津波など恐ろしい出来事に関わるだけではない。巨大資源であるメタンハイドレート（天然ガスの主成分のメタンと水が結びついた氷状の物質）も形成する。

室戸は海と陸を同時に感じることができる最前線。学術研究や新しい自然観だけでなく、われわれの生き方に関し、力強い発信ができるのではないか。

＜平成24年11月8日（木）高知新聞より＞

第4回 室戸ジオパーク写真コンテスト表彰式

審査委員長
前田 博史 氏の講評

今回のジオパーク写真コンテストの応募には、レベルの高い作品が多数出品されており、かなり見応えのある審査になりました。審査に当たって感じた事は、出品者の方々の室戸に対する想いと愛情、そして写真に対する熱意溢れる作品ばかりだったということです。写真はテクニックだけでありません。やはり写真に対する情熱と、撮影場所への熱い想いがなければ、その感動は写らないのです。室戸にはまだまだ良い撮影スポットがたくさんあります。多くの方々に、これからも熱い情熱を持って室戸を感じていただきたいと思います。

室戸ジオパーク大賞　北村 健三 氏　「黎明」

室戸市観光協会会長賞　石川 賢一 氏「巨大フレネルレンズ」

室戸市長賞　公文 俊郎 氏　「いのち脈打つ樹」

■11月3日（土）

「ジオパークのあゆみ」

講師：産業技術総合研究所地質標本館　企画運営グループ長　渡辺　真人氏

2005年、ジオパークに関わり始めたころ、私も「ジオパークって何？」と思っていた。ジオを理解できていなかった。

06年の国際大会に出席し、「世界ジオパーク」の基準をつくり、審査する「世界ジオパークネットワーク」（GGN）の人たちの講演を聞いて驚いた。

世界ジオのガイドラインには、地域住民の参加や、地域の持続可能な発展を目指すなどの理想的なことが多く書いてあり、当時は「何を絵空事ばかり」と思っていたが、彼らはそれを目標に、本気でジオをやっていた。

折しも、日本でジオを推進していた方が急逝。私は、活動を続けようと覚悟を決めた。GGNは国連教育科学文化機関（ユネスコ）が支援する組織で、そのユネスコの国内委員会が動かないことにはジオは推進できない。しかし、国内委は当初、消極的だった。

行政に働き掛ける連絡協議会ができ、国内各地でジオをやりたいという機運が高まってきた07年秋ごろから、国内委の様子も変わってきた。

08年、有識者らによって「日本ジオパーク委員会」（尾池和夫委員長＝高知市出身）が立ち上がり、「日本ジオパーク」の認定と推進がスタートした。手探りで始まった国内のジオも、わずか数年でこれだけ大勢の人が集まるようになった。

地域への効果も少しずつ見えつつある。ジオはすぐに効果が表れる特効薬ではない。むしろ、漢方薬のように、地域の体質を少しずつ強くする。ジオという共通の目標があることで、人々が自分の地域に誇りを持つようになる。地域内外につながりも生む。

皆さんに「もっと舞台へ上がろう」と言いたい。ジオはまだ始まったばかりで、先進地域はない。それでも各地に〝プロ〟が出始めている。そういう人たちに成功や失敗をどんどん語ってほしい。

また、日本や世界のガイドラインに不満がある人もいると思う。特に世界ジオは欧州が基準。日本の考えと合わない部分があるだろう。地質だけでなく、社会や政治の仕組みも違うから当然だ。

ただ、文句を言っても何も始まらない。仕組みを変える一番の方法は、仕組みををつくる側に回ること。ぜひ、加わってほしい。

＜平成24年11月9日（金）高知新聞より＞

■11月3日（土）

「自然と地域社会の心地よい関係のために」

講師：北海道大学大学院文学研究科　教授　宮内　泰介氏

宮城県の北上川河口の広大なヨシ原は貴重な自然として有名だ。地域を代表する自然としてポスターなどにも写真が使われている。

実は北上川は約80年前、治水のため、川の大規模な付け替え工事が行われた。新しく整備された河口に群生するようになったのがヨシだ。いろいろな動物も生息し、生態系が出来上がった。

このヨシはかやぶき屋根の材料として毎年刈り取られている。広大なヨシ原はかつて全国各地に見られたが、次第に少なくなり、今でも商売になる。つまり、人間が計画的に関わることで出来上がった自然であり、その自然でビジネスも成り立っている。

環境考古学という分野がある。遺跡などの土に含まれる花粉などを調べた結果、日本では3千年前からいろんな形で人間と自然の相互作用が進んできたことが分かった。それが日本列島の景観を形成してきた。決して昔は手付かずの自然が多かったということではない。

人々が使いながら守ってきた自然。もう少し調べると、地域社会がその管理主体になっていたことが分かる。北上川のヨシ原周辺には、契約講という伝統的自主組織がある。

ヨシは売れるため、ヨシをめぐって争いが起こる。しかし、争いばかりでは互いに損をするため、集落間で線引きする話し合いが始まった。頻繁に協議し、合意形成を図るようになった。

この地域、宮城県石巻市は昨年の東日本大震災で被災後も、高台移転の協議が比較的順調に進んでいる。話し合いでの合意形成に慣れているからだろう。自然との関わりで生まれた社会の仕組みが、防災や復興の助けにもなっている。人と自然の関係には人の側の仕組みが大事と言える。

一つのアイデアを挙げたい。日本自然保護協会が取り組んでいる「人と自然のふれあい調査」。住民と専門家が一緒になって地域を歩く、見る、聞くことで、地域の自然や歴史、文化を掘り起こしていく。調査結果を地図や年表などにするのも方法だ。

人と自然の相互作用、社会の仕組み、歴史、文化に注目しながら、自然と地域社会の心地よい関係をつくっていこう。

＜平成24年11月10日（土）高知新聞より＞

分科会　11月3日(土)13:30～16:30、11月4日(日)9:00～11:30

分科会 1

テーマ:「保護と活用」【会場】室戸市役所　第1会議室
【参加者】11月3日57名、11月4日39名
【コーディネイター】浅野 敏久氏(広島大学大学院総合科学 准教授)

本大会のテーマ「人と地球の心地よい関係のために」を考えるにあたって、人と自然との関係性を保つための活動(保護)と関係性をうまく利用し地域振興を促す活動(活用)は、必要不可欠な検討事項そのものである。

ジオパーク活動において、保護・活用の対象となるべきものは地質や地形だけではなく、地上で生息している生態系や人々の生活や歴史・文化も含まれている。

本分科会は、「地球」と「人」が心地よい関係であり続けるための真の意味での「保護・活用」とは何かを考える分科会である。

参加者がより「保護」や「活用」について具体的に議論するために、初日には、アイスブレイクの実施の後、室戸ジオパークにおける4つの事例紹介とそれに応じた4つの議題を提示した。議題提示後には各グループが議題を一つずつ選択した。

二日目は、初日に選択した議題について、各グループでディスカッションを行い、最後にグループごとの発表と意見交換を行った。

【アイスブレイク(参加者間のコミュニケーション促進)】

参加者各人の自然体験エピソードについて互いに紹介し合う「はじめまして」というネイチャーゲームをアイスブレイクとして実施した。このアイスブレイクによって、グループ内でのコミュニケーションが促進し、議論を行うための雰囲気作りを行った。

【取り組み事例紹介と議題】

事例1:恵みと資源管理～海洋深層水の活用と資源管理～

発表者:室戸市商工観光深層水課　堺 宗大 氏

室戸市東海岸は、「海洋深層水」が取水されている場所である。海洋深層水は水産業や農業や医療分野等、多方面で活用されており、大地の恵みそのものである。

無尽蔵な資源として利用されている海洋深層水であるが、

①資源としての価値を守るために水質放射性物質を含む検査を実施

②周辺環境(漁場)への配慮のために、業者と協定を結び、排水時の管理を実施

といった資源管理が行われている。

事例2:地域資源の活用と保護～段ノ谷山の天然杉:注目されるジオサイトと保護のあり方～

発表者:佐喜浜の源木を育てる会　田村 拓 氏

室戸市佐喜浜町の山岳にある段ノ谷山サイトは、天然杉の巨木が30本以上生育している。室戸が世界ジオパークに認定され、マスメディアに天然杉が紹介され始めた頃から、このジオサイトへの入山者数が増加しつつある。現在、段ノ谷山サイトで問題とされている事象は、入山者数増加による自然保護のあり方である。

事例3:教育活動への利用と自然保護～奈良師-元海岸:ジオパークへの地元のこどもたちの関わり方～

発表者:室戸ジオパーク推進協議会　殿谷 梓 氏(元小学校校長 包國浩哉先生代理)

室戸市立元小学校は、毎年ウミガメのふ化・飼育・放流活動を行っている。ウミガメ保護活動の中に、「自然保護」「命の尊重」などの教育的活動を見いだし、上記活動を47年間行っている。また、元小学校では総合学習などの時間に、ジオパーク学習会を行う活動も実施している。ウミガメの産卵場である元海岸の砂浜は減少傾向にあるため、ウミガメ保護活動とジオパークをとおして、大地を含む自然の保護の担い手を育てることにつなげたい。

事例4:観光地と保全活動～観光(自然利用)とゴミ問題～

発表者:室戸市観光ガイドの会　山川 興子 氏、細川 季代 氏

室戸岬サイトを日頃から案内していると、海岸に散在しているゴミを観光客に指摘されることが多々ある。これらのゴミは不法投棄よりも海から漂着したものがほとんどである。そのため、外国で投棄されたゴミも多々遊歩道沿いで見受けられる。ガイドとしては、単にゴミを拾って美化活動を行うだけではなく、ゴミを話の材料にする等の取り組みを行い、マイナスイメージからプラスイメージに変える工夫を行っている。

また、自然(海)によりもたらされるゴミは、誰かが美化活動を行う必要があり、怠ると美しい景観の維持にはならない。そのためには、今後も美化活動を継続させていくことは必須である。

上記①～④に対応する議題は下記の4つである。

議題①:大地の恵みをどう活用し、どう資源管理していくのか。

議題②:生態系の保護と活用(ツーリズム)を両立させるにはどうすれば良いか。

議題③:大地や生態系の保護活動を教育活動につなげることの意義、具体的方法は何か。

議題④:景観保全や美化について、ジオパークとして取り組めることは何か。

【グループディスカッションの結果】

議題①:化石等の採取は将来的に資源の枯渇につながる可能性がある。ジオツアーにこどもたちが関わることは、将来の資源の保護・活用につながる取り組みである。

議題②:地質遺産を始め、ジオパークの資源を保護していくためには、調査・研究が必須である。そのためには、助成金や行政の支援を利用する等を検討する必要がある。

資源の保護のためには、ガイドの増強・質の向上を行う必要があり、ツアー代金等にその分の料金をもらい、付加価値をつける。

保護のために、まずは地域住民にサイトの価値を知ってもらうことが大事。また、サイトのランクづけを行い、場合によっては、そのサイトを一般公開しない(もしくは限定期間だけ公開する)、という対策も必要なのでは。

議題④:美化活動に関しては地域のこどもたちにも関わってもらうことが必要。他地域でも地域の清掃活動や収集したゴミを使った取り組みを実施している。ゴミ問題をはじめ、地域住民にとってジオパーク活動は生活そのものである。今後は、毎年ジオパークの大会で統一テーマを決め、次回大会にその事例報告を行うようにするのはどうか。ゴミの収集等の保護活動には費用がかかるので、それをカバーする仕組みが大切。

※議題③について選択したグループはなかった。

【分科会①の総括】

上記の発表及びグループ間の意見交換の結果、分科会①の総括は下記のとおりとなった。

◆保全には調査・研究が前提である。そのためには、調査研究の支援・環境整備が必要である。

◆保全活動を行うためには、ガイドのような身近な環境管理者が必要である。ガイドを増やしたり、質を向上させることで、結果的にガイドの付加価値を向上することにもつながる。

◆化石や鉱物の採取問題、ゴミの問題、保護のタイプによる論点整理等、ジオパークは普及活動の段階から問題解決の段階に至っている。これらの課題や新たにもたらされる課題の中から年次課題を位置づけ、取り組む必要があるのではないか。

◆地質・地形資源を始めとする自然資源の保護活動の運用資金について、ジオツアーなどツーリズムから保護活動に還元できる費用を獲得できる仕組みをつくる必要がある。

分科会 2

テーマ:「高校生セッション」【会場】室戸高等学校　視聴覚室
【参加者】11月3日63名、11月4日61名
【コーディネイター】山本 隆太氏(早稲田大学教育学部 助手)　中川 和之氏(時事通信社山形支局長)

【趣旨】

室戸ジオパーク大会では、高校生同士の交流と議論を中心とした分科会が行われた。参加した高校生はジオツアーやプレゼンテーション、グループディスカッションを通じて、各地のジオパークや地域の災害についての知識や体験を共有した。また、教育関係者の意見交換も実施した。そして、今後のジオパーク活動を通じて持続可能な社会の構築にどのように貢献できるかを高校生の視点から議論し日本ジオパーク高校生宣言としてまとめた。この高校生宣言は、高校生たちの今後のジオパーク活動に対するスローガンとして位置づけている。宣言に向かって活動を進めていけたかどうか、今後のジオパーク大会でも継続的に情報交換を行い、さらに議論を深めていく。

●事前アンケート

この大会に先駆けて、全国のジオパークに暮らす高校生を対象とした、ジオパークの学習に関するアンケート調査を実施した。アンケート調査結果は、ディスカッションのたたき台として利用した。

●1日目【ジオツアーとプレゼンテーション&ディスカッション】

室戸高校生ガイドによるジオツアー [室戸岬ジオサイト]

地元の室戸高校生が、全国のジオパークから集まった高校生を相手に室戸岬ジオサイトを案内した。解説ポイントごとに高校生ガイドが交代するリレー形式で行われ、ガイドトークの中には笑いの要素が取りいれられたり、紙に書いた図を使って説明したりと各所に興味を引き付ける仕掛けや工夫が見られた。

移動中のバス車内では、室戸高校の取り組みについて担当の先生から説明があり、その中では地元のジオパークガイドの方々と高校生が一緒になって活動することなどが報告された。

プレゼンテーション&ディスカッション [室戸高等学校 視聴覚室]

プレゼンテーション

地元室戸の高校生によるジオサイトガイドに続いて、全国のジオパークから集まった高校生たちが地元の「マイジオパーク」について報告発表を行った。テーマは自分たちのジオパークの紹介や高校での活動、防災についての取り組みなどで、どのジオパークもその場所の地域性がよくあらわれた発表が行われた。[写真A]

ディスカッション

プレゼンテーションの内容を踏まえ、ジオパーク高校生宣言としてどんなテーマを扱っていくべきなのかテーマ決めのためのグループディスカッションを行った。

各テーブル6人程度で班を作り、班ごとに話し合った。まず意見をポストイットに書いて共有し、そこからテーマを選定した。各班には記録係として大人が1名ずつ席に着いたが、議論に口を挟まないよう記録に徹した。

例えば1班では、「地域と防災」をキーワードとして議論を始めた。各地の地域状況と防災について情報交換し、地域ごとに災害の種類や対応が異なることを確認した。その上で、地域の魅力と災害、景観と津波など「人と自然の共生」についてジオパークとして発信することが重要であると考えた。それに対して高校生としては何ができるかを考えた際、まず「地域へ発信すること」が大切であるということから、小中学生に教えることに関するテーマを挙げることとした。

2班では災害と地域活性化についての話し合いから始まったものの、自分たちがジオパークとどう関わっていくかを考えるべきであるとの立ち位置を確認し、ジオパークの地域での活かし方に関するテーマを取り上げた。3班では、イベントや商品開発を通じた地域活性化と自然災害の被害を抑えるための防災をセットにしたテーマを発表した。4班では、ジオパークで地域をどうしたいかという内容を話し合ったところ、観光業の発展や防災取り組みの活性化、地域史の研究などが挙げられた。5班では、観光客の増加と地域経済の活性化という目標に対して、高校生としては土産物のアイデアや、ジオパークを伝える後継者育成などに貢献できるのではないかと考えた。6班では、各地の名所や美味しい食べ物の話題から、ジオパークの魅力について話し合うべきだと考えた。

■1日目のディスカッションの結果

1班	高校生が教える側にたってどう教えるか
2班	ジオパークを地域でどう生かしていくか
3班	活性化と災害防止にどう地域で取り組むか
4班	ジオパークと観光経済の発展
5班	ジオパークに観光客がどうすればくるか
6班	魅力的なジオパークづくり

大人のディスカッション [室戸市保健福祉センターやすらぎ]

高校生のディスカッションの終了後、大人グループでは、大人が「高校生たちに期待すること」について話しあった。高校生のディスカッションの様子や、普段の各学校での学習活動に基づいて参加者から意見が出され、将来を見越したグローバルリーダーの育成や高校生の感性を生かした活動、地学以外のジオパークの活かし方、地域が好きであることを表現する、下の世代へ伝える、地球のために挑戦してほしい、など多くの意見が交わされた。こうした意見交換を経て、高校生への期待は以下のようにまとめられた。

1グループ	●地域を愛する者として、地元のジオパークに興味を持って活動してほしい。●大人の期待に応えず、自分の感性を信じてチャレンジしてほしい
2グループ	●高校生ならではの視点・行動・発信(伝えて!)●被災している場所でまちを元気に!●ガイド活用ビジネスモデルのアイデア!●地元の良さを知ってほしい→ジオの視点で発信して!●ジオパークの力で人とのつながりを!●教科の枠を超えた学習に、主体的に取り組んで!

宿泊:青少年自然の家(交流会)

1日目のディスカッションについて、各グループ毎に内容を再度確認した。また、交流会を行った。

●2日目 大人から高校生への期待・ワールドカフェ・高校生宣言

[室戸高等学校 視聴覚室]

大人から「高校生に期待すること」

高校生宣言に向けたディスカッションに入る前に、大人グループが前日話し合った「高校生に期待すること」を発表した。地域への愛着や地域活性化に対して高校生の視点でアクションを起こして欲しいことや、地質から文化歴史まで多様な側面を持つジオパークを学ぶにあたっては主体的な学習活動が欠かせないため、積極的に学んで欲しいことなどが大人から高校生へと伝えられた。こうした具体的な大人の期待が伝えられる一方で、大人たちの期待に応えずに、自分たちの感性でチャレンジして欲しいといった高校生の自主性を重んじる意見も伝えられ、高校生に対するさまざまな期待があることをセッション内で共有した。ジオパーク大会初の高校生セッションとして、その中心にいるのは高校生だということが改めて確認された一幕でもあった。

ワールドカフェ

このセッションでは、高校生たちが主体的に考えた高校生宣言を発表することに加えて、「ジオパークの高校生同士のネットワーク」として横に繋がっていくことが大切だとコーディネーター側は考えた。そのため議論をしながらも、高校生同士がなるべく多くのメンバーと話し合う機会を持ち、ネットワークを築けるよう、ディスカッションのグループメンバーを流動的にするワールドカフェを行った。1日目に掲げられた6つのテーマを6つのテーブルそれぞれに割り当て、高校生はターン制(15分毎)でテーブルを移動しながらディスカッションを行った。最初のターンでは、テーブルのテーマを「今後どうしていくべきか?」というテーマの将来に関して話し合い、続く第2ターンでは、「高校生はなにができるか?どうしていけばいいのだろうか?」という高校生の視線や活動にテーマを落とし込んでいった。それらは最終的に、高校生宣言としてまとめられた。

	2日目のテーマ	地域は今後どうしていくべきか?	高校生は何ができるか?	宣言
1	高校生がどう教えるか伝えるか	ガイドやジオツアー、講演のために知識をつける	地元地域をもっと良く知ることのできる授業をつくる	学ぶ　発信　楽しむ
2	ジオパークの魅力を知ってもらうには	小中学校の時から学ぶ機会を作る、高校生が小中学生をガイドする	ジオパークの知識を深めるために多様な学びをする	ジオパークを学ぶ環境作り
3	地域活性化と災害意識高める	地域や観光客に対して災害についての情報発信	ツアーやイベントによってジオパークを学ぶ機会を提供する	ジオパークについてもっと知識を高めるぞ!
4	観光経済の地域発展	環境整備とわかりやすい説明	ジオパークについて知る・学ぶ	教えたい、地域の良さと、ジオパーク
5	観光客にわかりやすい説明	自分なりのジオを見つける 高校生には高校生が、小学生には小学生がガイドする	まず自分がジオサイトをまわる ジオパーク学を授業に取り入れ、必修科目にする	ジオパークの楽しさをもっともっと笑顔で伝えるぞ!
6	魅力を伝えるためにできること	他県へのアピールや、多くの人が関わることが必要	自分たちが興味を持ってジオパークに関わり、下の世代に伝える、広げていく。	Geoparkの魅力をネズミ算式に広げ、地域をひとつにします!

第1テーブルでは、「高校生がどう教えるか、伝えるか」というテーマに対して、高校生ガイドを通じて小中学生に教えることや、ブログや講演などを通じての情報発信が必要であること、またそのためには自分たちの知識やスキルを上げる必要があることを確認した。今後は知識をどう身につけるかが課題であり、とりわけ学校の授業が大切であるため、地域について学べる授業を作ったり、放課後のフィールドワークを企画することなどが改善策として考えられた。高校生講師や高校生ガイドによって次世代の後輩を育成することや、ITを使ったブログなどの発信に加えて、まずは自分たちが学ぶという姿勢が必要である。また他のジオパークについて学んだり、そこで行われている活動を知ることを通じて、自分たちの活動に取り入れて改善していく観点も大切である。学んだことを「発信」することが重要であると考え、「学ぶ 発信 楽しむ」というキャッチフレーズを作った。

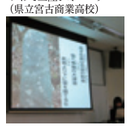
第2テーブルでは、「ジオパークの魅力を伝えるには」というテーマについて、今後、地域をもっと知ってもらうためには、小・中学校からジオパークを学ぶ機会を作り、また高校生がガイドすることを通じて小中学生に教えていくことが大切だと考えた。そこでまず、地域住民アンケートを行って現在のジオパークの認知度を調べるとともに、高校生自らツアーやボランティア活動を通じてジオパークの知識を深めていくことを確認した。そこで、「魅力を知ってもらう活動」「ジオパークの知識を深める」のふたつにまとめたが、その内容を具体化させていく中で、魅力や知識を学ぶ環境が整っていないことに気づき、「ジオパークを学ぶ環境作り」を宣言文とした。

[写真A]

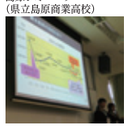
阿蘇ジオパーク(県立阿蘇中央高校)

糸魚川ジオパーク(県立糸魚川高校)

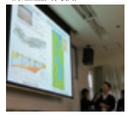
いわて三陸ジオパーク(県立宮古商業高校)



島原ジオパーク(県立島原商業高校)



山陰海岸ジオパーク(県立豊岡高校)



第3テーブルでは、「ジオを通じて地域全体を活性化させ、防災意識を高める」というテーマについて、地元へのPRやイベント・ツアーを通じて地域の人や観光客に地域の災害について伝えていくことが今後必要だと考えた。そのために、ジオパーク学を学んでいない人にもジオパークを学ぶ機会を作ったり、わかりやすいガイドを育成することを高校生として取り組んでいくこととした。そして宣言文は高校生の目線から「ジオパークについてもっと知識を高めるぞ！」に決めた。

第4テーブルでは、「魅力的なジオパークと観光経済の地域発展について」というテーマについて、経済効果を上げるために観光名物が必要であることと、地域発展には地域住民の連携が必要であることを確認した上で、それらの実現には環境の整備とわかりやすい説明が必要であることを見いだした。それらの課題に対して、ジオパークの運営主体が標識や案内を整備するとともに、高校生は経済効果拡大や地域発展に資するために、まず自分たちが地域の魅力についてジオパークを通じて知る・学ぶことが必要だという結論に至った。「ジオパークについて知らない人がいなくなるために地域全体に協力してほしい」という地域社会への願いと、「教えたい　地域の良さと　ジオパーク」という五七五調の活動方針のうち、後者が参加者全員の拍手によって選ばれた。

第5テーブルでは、「観光客がわかりやすいジオパークについての説明の仕方」を今後どうしていくかについて話し合ったところ、高校生には高校生がガイドし、小学生には小学生がガイドするなどお互いに年が近いことで分かり合えるのではないかという意見や、相互のガイド活動を観察してわかりにくい点を改善するといったガイド活動のレベルアップや、わかりやすい模型を作ることなどのアイデアが出された。ジオパークの学びについては、授業にジオパークの内容を取り入れたり、ジオパーク学を必修科目にすることが考えられ、また良いガイドを行うためにはトーク力と笑顔が大切だと考えた。笑顔を出すにはガイド活動を自分自身が楽しむことが大切である。そのため、「ジオパークの楽しさをもっともっと笑顔で伝えるぞ！」というキャッチフレーズをつくりだした。

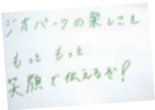
第6テーブルでは、今後「魅力を伝えるためにできること」をどうしたらいいのか考えたところ、学習機会を増やしたり他県へのPRも考えたが、特に関わり合いが大切であるという観点に気が付いた。そこで自分たちが興味を持ってジオパークに関わり、下の世代に伝えていくことが高校生にできることであり、ジオパークの魅力が地域にネズミ算式に広がり、地域が一つになることが大切だと考えた。

参加した高校生は、自分たち地元のジオパーク（＝マイジオパーク）に関する知識や経験をもとに話し合いに積極的に参加するとともに、日本全国には色々なジオパークがあることを、セッションを通じて感じとった様子であった。また、どのテーブルでも「もっとジオパークについてよく知るべき」といった勉強不足を痛感したコメントが頻繁に聞かれた。

日本ジオパーク高校生宣言

大会3日目のシンポジウムにおいて、日本ジオパーク高校生宣言を行った。2日間に渡る高校生セッションの活動報告に続いて、パフォーマンスを交えながら高校生宣言を発表した。宣言の様子はYoutubeの「第3回日本ジオパーク大会 3日目 - 日本ジオパーク高校生宣言（アカウント: OfficialJGN）で閲覧できる。
http://www.youtube.com/watch?v=2c4p73zDJbU

日本ジオパーク高校生宣言

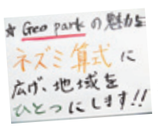


ジオパークの楽しさをもっともっと笑顔で伝えるぞ！

僕たちは、いろんな人に知ってもらい、笑顔になって欲しいと思っています。そのためには、自分たちがジオパークについて良く理解し、楽しく笑顔で伝えることで、ジオパークの楽しさを知ってもらえると思います。聞いた人が、いろんな人に話したくなるような、そんなジオパークの楽しさを広げていきたい。

ジオパークを学ぶ環境作り

個人で学ぶには限界があります。ジオパークがある地域でも、学ぶ授業があるのとないのとでは、地域への浸透が大きく変わります。私たち高校生だけでなく、小中学生のうちから学べる機会を作ってもらいたい。ジオパークの活動を地域全体で活発にしていきたいです。地域内だけでなく、外部のみなさんも学べる機会も作ってもらいたい。遊びやふれあいなどの工夫を入れ、活発にしていきたい。

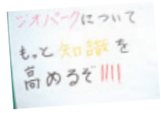


Geoparkの魅力をネズミ算式に広げ、地域をひとつにします！

私たちに出来ることを考えた結果、自分たちがジオパークに興味を持ち、関わり、よく知って、下の世代に伝えていく必要がある。楽しいイベントはパンフレットの作成をして、よりたくさんの人にジオパークに興味を持ってもらい、最終的にはネズミ算式に広がり、地域がひとつになるようにしたい。

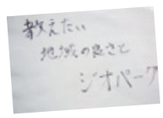
学ぶ　発信　楽しむ

私たちは、学ぶ、発信、楽しむにしました。十分な知識を身につけ、小学生からお年寄りまでに伝え、ジオパークを楽しいものにしたいと考えました。



ジオパークについてもっと知識を高めるぞ！

私たちの周りに、ジオパークについて知らない人がたくさんいます。地域の人や高校生にまず知ってもらいたいと思いました。



教えたい、地域の良さと、ジオパーク

ジオパークの良さを知らない人がいます。知ることで地域の良さを知ることが出来ます。そのためにはまず僕たちが学び、地域の良さを知ることが大事。自分たちの地域に対する思いが伝えられると思いました。

分科会 3　テーマ：「ジオパークと地域住民との関わり」【会場】室戸小学校　体育館

【参加者】11月3日85名、11月4日62名
【コーディネイター】宮内 泰介氏（北海道大学大学院文学研究科教授・環境社会学会会長）

本分科会は、ジオパークで重要視される地域住民とのかかわりについて、具体的なサブテーマを設定し、グループワーク形式でおこなわれた。各ジオパークは、現在それぞれの課題を抱えているが、そもそもジオパークは地域づくりのためのツールでしかない。各地域の現状・課題を踏まえて、ジオパークというツールをどう利用したいのかを考える契機になるよう会議は進行された。よって、各テーマによる議論は、分科会全体のまとめをすることを重要視せず、各参加者がグループワークを通して多種多様な意見に接し、新たな気づきが生まれることを大切にした。また、ワークショップ形式や、冒頭でのアイスブレイクプログラムを通して、参加者同士のコミュニケーションを促した。これは、今後の日本ジオパークネットワーク（JGN）全体の活性化に大きく寄与するものと期待される。

●1日目

アイスブレイク（グループ分け）：参加者による「人間日本列島」。参加者同士でコミュニケーションをとりながら、人間で日本列島の形をつくる。参加者は和気あいあいとした雰囲気で、日本列島を作りだした。

<テーマ①>　ジオパークの運営組織と地域住民

ジオパークの形態は、各地によって違う。行政主導で形成されていることもあれば、住民主導でやっている場合もあり様々である。ボトムアップによる運営の重要性が叫ばれている中、どんな組織運営方式にすればよいのか、どうすれば住民主体のジオパークができるか、ボトムアップになっていくのか、そのあり方を議論した。まず、各ジオパークの運営方式、地域住民とのかかわりについて、自慢したい点、課題点を書き出す作業をおこない、その後、自己紹介をしながら、各意見をグループ内で説明し共有した。各グループの中から出てきた情報としては、例えば、ゆざわジオパークでは、ジオパーク推進協議会が行政と住民が一体となって運営されている事例があった。各地域の住民代表からなる地域づくり協議会がジオパーク推進協議会に入っており、住民参加型につながる工夫がされている。また、霧島ジオパークでは、民間団体による活性化会議が立ち上がっており、ハードは行政、ソフトは民間という両輪での運営が試みられている。

<テーマ②>　防災と地域住民のかかわり

ジオパークでは、地球の地球科学的要素やそれにかかわる歴史・文化社会を住民が学び、それを活用していくことが求められている。特に昨年3．11の震災以降、防災という点でもジオパークが果たす役割は重要だと指摘されている。本テーマでは、ジオの活動の中で地域の自然や文化を学ぶことが、どのように住民の防災活動に結び付けられるのかを考えた。各グループの中から出てきた事例としては、ゆざわジオパークでは、今年で12回目になる住民主体の避難訓練の事例があった。湯沢市内には住民主体の自主防災組織があり、積極的な活動を続けている。ジオパークと直接関係なく実施してきた事例であるが、自主防災組織の活動は、ジオパークの活動と結びつけることができる。ジオパークと連携した今後の活動が期待される。室戸ジオパークでは、ガイド中に津波がきたらという想定で避難訓練をした事例があった。どこに逃げたらよいのか、諦めではなく、どうしたら生き残れるかを考えた。男鹿半島・大潟ジオパークでは、災害が起こった後でどう行動すべきかを考える事例があった。例えば、子育てカフェでは、若いお母さんたちが、地震などによってライフラインが断たれた後の非常食として、伝統的な保存食（漬け物等）の技術を活用できないか地域住民と考えた。また、災害時に活用できるよう、組み立て式リヤカーの組み立て体験や、お母さんが怪我をしている想定で子どもにリヤカーを引かせる訓練などを実施した。

コーディネーターの宮内泰介氏からは、東日本大震災における石巻の事例情報が提供された。建物の被害は、海に面した地区が大きかったが、人的被害は内陸の方が多かった。明治に大津波の経験談が、海側の集落では口承伝承として伝えられており、危機意識が高かったが、内陸は、津波を見に行った人も多かったために、人的被害が大きかった。このことから、防災意識の大切さは、公的な物だけでなく、親子の体験談など非公式なものも重要であると指摘があった。

●2日目

アイスブレイク（グループ分け）：参加者全員で誕生日の早い順に並んでみよう。参加者同士でコミュニケーションをとりながら、誕生日順に並んだ。今回の参加者には8月生まれはいなかった。

<テーマ③>　観光と地域住民とのかかわり

ジオパークにおける観光（ジオツーリズム）は、ジオパーク実践の中で最も重要な要素である。現状では、地質学的コンテンツをいかに観光客に楽しませるかという点に力点が置かれているが、地質学にとらわれないより広い視点で地域の風土を理解してもらうにはどうしたらよいのか、そのあり方を考えた。各グループでは、ジオパークの見せ方やストーリー作りの課題、見せる側の体制の問題、行政と民間の連携の問題、そもそも観光をジオパークの根底に置くべきなのかといった議論が繰り広げられた。事例報告は、室戸ジオパークの日帰りモニターバスツアーの報告があった。室戸で実施した募集型のモニターバスツアーでは、参加者の大部分が高齢者であったこと、ツアー代金はある程度高くてもいいという感想が寄せられた事例が報告された。また、おおいた豊後大野ジオパークからは、民俗的コンテンツを応用したジオストーリーづくりの情報提供があった。

<テーマ④>　みなさんの地域ではジオパークをどう活用するのか

ジオパークは、地域で何かをするための道具と考えることができる。ジオパークを使って何をすべきだろうか、何をしたいのかを本分科会最後のテーマとして取り上げた。会場からは「ジオパークを通して地域住民が元気になる」「ジオパークを通して地域を好きになる」「“帰ってこいよ”～生まれた人帰ってこいよ。観光で来た人帰ってこいよ」「ジオパークは合意形成の手段である」といった意見が出された。

分科会 4　テーマ：「ストーリー作りと表現法」【会場】室戸高等学校　体育館

【参加者】11月3日75名、11月4日53名
【コーディネイター】迫田 司氏（サコダデザイン代表取締役）　佐々倉 玲於氏（佐々倉玲於ファシリテーター事務所代表）

【分科会趣旨】

ジオパークにおけるストーリーとは、ジオパーク地域にある自然・文化・食・習慣などの素材の繋がりのことを指す。ストーリーをもとに観光や商品や教育プログラムの開発を行うことで、訪問者や地域住民にとってより分かり易い紹介が可能となる。世界ジオパークのガイドライン「第1部 - 基準 1. 規模と環境」においても、「地質学に直接関係のないテーマでも、地形や地質と深く関わっていることが学べるのであれば特に、ジオパークを構成する要素として強調すべきです。これが、有形無形の遺産に加えて、地質多様性、生物多様性、文化を組み合わせることで、さらなる効果を生み出す」と書かれており、地質以外の資源との関連の重要性が指摘されている。しかしながら、ストーリーを地域住民と共有し発展させることがジオパーク地域の課題である。そこで、地域住民とともにストーリー作りや商品開発・デザインをされてきた経験のある迫田さんと佐々倉さんと一緒に、ストーリーを作る過程を体験し、各地のジオパーク活動に活かしていくことを本分科会の目的とする。

●1日目

■アイスブレイク

・会場に設置した大きな日本地図に、全国から持ち寄った特産品を配置した。
・参加者が日本列島を形作るようにして整列し、自己紹介を行った。

■講演
　迫田司さんよりストーリー作りの事例として、高知県四万十市名鹿地区や高知県佐川町の地乳（じちち）が紹介された。地域住民とのコミュニケーションの中で地域の習慣や暮らしを知り、商品やイベントのデザインに活かす過程を学んだ。
■グループワーク「ジオ自慢」
　グループに分かれ、自分のジオパークの資源を紹介しながら、地域にあるジオパークの資源がどのように日本中に分布しているのかを把握した。さらにその資源を、①特産品　②観光　③産業　④教育　⑤環境　⑥防災　⑦地質のテーマに分類した。様々な立場や地域の人が一緒に話し合うことで、効率よく分類ができた。

●2日目
■グループワーク「ストーリー作り体験」
　1日目に抽出した7つのテーマについて、これまで話し合ってきた情報を参考にしながらストーリー作りを行い、参加者の前で発表した。1日目とは異なり、テーマ毎に話し合いたい人が集まり、6名程度のグループを編成した。
【作られたストーリー】
①特産品：「学べるお菓子・ジオ見るフィーユ」
　・地域特産品を使い、各地のジオパークの大地の特徴を表した菓子作りの提案。
②観　光：「なんじゃろ？ジオパーク」
　・楽しいポスターの制作の提案。
②観　光：「海を楽しむジョ！」
　・海岸線でのアクティビティを一緒にした情報発信の提案。
②観　光：「四季折々、ジオトライアスロン」
　・全国でジオの特性を体感できるプログラムの事業化の提案。
③産　業：「ジオがあれば何でもできる」
　・ジオパークが含む多様な資源である鉱、漁、林、農、商の連携についての表現。
④教　育：「ジオパークという言葉を出さない教育」
　・国数英理社はもちろん、家庭科や音楽にもジオの視点を入れた授業の提案。
⑤環　境：「ジオ水認定」
　・水源となる大地と生態系の保護を目的とした認定制度の提案。
⑥防　災：「恵み≫災害」
　・災害よりも恵みが大きいから私たちはここに住んでいることを表現。
⑦地　質：「僕の名前は“日本大地”」
　・日本の大地を小学生にたとえて、分かり易く表現。
⑦地　質：「動く日本列島」
　・日本列島の発達過程を一枚の図でシンプルに表現。

【コーディネーターのコメントより抜粋】
　これまで、地域づくりのベースにジオの視点がなかった。私たちはデザインにおいて、その土地の「地域のDNA」を引き出すことが大事だと考えてきた。ジオから地域のストーリーを引き出せば、そこから生まれるサービスが、よりスムーズなコミュニケーションを作ると、今回の分科会の参加者が表してくれた。

分科会 5　テーマ：「ジオパークを活用したビジネス」【会場】室戸高等学校　多目的ホール
【参加者】11月3日60名、11月4日53名
【コーディネイター】今井 ひろこ氏（特定非営利活動法人たじま海の学校 副代表）

【はじめに】
　本分科会では、ジオパークを活用したビジネスの先進地と思われる地域の取り組みを紹介するとともに、ワークショップ形式でビジネスを行う上で生じる問題点や課題について議論した。その際、単にビジネス＝一時的な経済利益ではなく、「ジオパークをビジネスに活用し、地域の活性化につなげるためにはどうすればよいか」という点に着目した。

【目的】
・異なる地域、業種、立場の参加者が集まることで、地域が抱える問題点の整理とその解決方法について情報共有。
・住民、事業者、行政、研究者などのジオパーク運営に携わるすべての人々が連携できる「ジオパーク像」を描く。

●1日目
　分科会参加者らの自己紹介から始まったがその際、各地域の特産品も共に紹介され、PRの場ともなった。その後、ジオパークとビジネスの分野において顕著な活動をしていると思われる地域の事例報告を行った。発表者とその内容は以下の通り。
事例報告：
①洞爺湖有珠山ジオパーク事例発表
「イメージグラフィックを活用した広報戦略」
　報告者：北海道洞爺湖町ジオパーク推進課　中谷 麻美氏
「ジオパークを活用した商品開発」
　報告者：洞爺湖有珠山ジオパーク火山マスター
　川南 恵美子氏
②室戸ジオパーク事例発表
「ジオパークのロゴマークを活用した商品販売の事例を発表」
　報告者：有限会社山本かまぼこ店　三代目
　山本 正幸氏
③山陰海岸ジオパーク〈豊岡市〉事例発表
「ご当地キャラクターを活用した事例」
　報告者：山陰海岸ジオパーク推進協議会　小林 辰美氏
④山陰海岸ジオパーク〈香美町〉事例発表
「ジオパークの民間活用（団体、個人商店）の事例」
　報告者：民宿経営者　今井 学氏
1日目まとめ：
　行政職員、実際にジオパークをビジネスのツールとして利用している地域の事業者など、多様な立場の方に事例紹介をしていただいた。事例発表から、まずはジオパークをどう広報していくか、という点もビジネスを考える際に重要であることが見えてきた。そもそもジオパークの知名度が低ければ、それを利用した商品、観光等、ビジネスにつながっていくことがない。行政だけでなく、地元事業者らの協力により、ジオパークグッズやロゴマークを用いた広報の重要性が強調された。また先行地のジオパーク活用事例を知ることにより、参加者は自地域のための新たな着眼点やプロセスを得ることができた。

●2日目
　2日目のワークショップでは、本分科会に参加していた多様な職種・立場の者（住民、事業者、行政、研究者など）が協働できる「ジオパーク像」を描くことを目的とした。ワークショップは分科会前に実施されたアンケートをもとに構成された。参加者をグループ分けし、事前アンケートから得られた課題「ジオパークを活かした商品づくり」、「民間事業者をジオパークに巻き込むためには」、「ジオパークの観光客は誰か」、「ジオツアーとそうでないツアーの違いとは」等について、ワークショップ形式で議論を進めた。
　「ジオパークを活用したビジネス」と言っても、その内容は商品開発から観光まで多岐に渡る。それらについて、分科会に参加していた異なる職種、立場の人々によって多角的な視点から議論がなされた。職種や立場が異なれば、ジオパークの捉え方も異なることから、ジオパークの多義性についても再認識する機会となった。

【まとめ】
　多様な立場の者が集まる全国大会の分科会という機会を通じて、ビジネスに関する情報交換と議論の場が作られ、地域間、業種間での「つながり」ができたように思われる。「つながり」を作ることは、本分科会の目標の1つでもあった。
　そこには「ジオパークとはネットワーク」であるという思想が基盤にある。「ジオパークを活用したビジネスとは、現在ある地域資源にジオストーリーを見出すことで、まちのやる気ある人をつなげ、観光で得た資金を地域内で循環させる仕組みを作ることだという本分科会の暫定的な結論も、その「ネットワーク」の思想に準ずるものである。
　全国大会終了後も、本分科会はその参加者や関係者らによってFacebookグループを形成し、不定期にではあるがウェブ上での議論が継続されており、「つながり」が保たれている。

日時I11月4日（日）13：30～17：20　会場Iメイン会場　室戸市保健福祉センターやすらぎ 夢ひろば

テーマ：「人と地球の心地よい関係のために」

アトラクション（吹奏楽演奏）

「日本のジオパークの特徴とこれから」
講師：東京大学地震研究所　教授　中田 節也氏

　「世界ジオパーク」に認定された地域（室戸ジオは昨年9月認定）は4年に1回、再審査があり、基準に満たなければ、認定が取り消される。
　現在、世界認定は92地域（26ヵ国）。認定地域の増加に伴い、再審査の基準も年々厳しくなっており、来年1月には、イランとオーストラリアの計2地域が削除される。
　当然、新規認定のハードルも上がっている。今年9月には島根県の隠岐ジオパークの世界認定が見送られた。隠岐の他にも世界で数ヵ所が保留とされ、申請が却下された地域もあった。審査の厳格化が進んでいる。
　認定されるには、世界のジオを見に行き、国際会議で発言し、存在感を示す必要がある。世界ジオだけでなく、日本ジオの審査も今後、厳しくなっていくだろう。
　そんな中で、新規認定されたり、再審査をクリアするにはどうしたらよいか。
　日本のジオの特徴はストーリー性にある。地域の地質が人々の生活とどう結びついているのかが分かりやすく示されている地域が多い。ジオを使った学校教育や防災教育でも世界をリードしている。
　問題点は自治体が主体になっていることだ。自治体は担当者が定期的に変わるし、自治体ごとに温度差がある。行政だけが一生懸命やると、住民に見放され、失敗しやすい。
　ジオの安定運営には住民参加の徹底が必要になる。そうすれば、市長が「やめよう」と言い出しても、住民が反対する環境を作れる。できれば、独立した組織が運営するのが望ましい。
　ボランティアに頼ったガイドも不安の一つだ。無償では、持続性、質の保証に限界があるだろう。
　他にも、景観を損なわない看板作りやQRコードの利用、拠点施設としての図書館の利用などもあり得る。図書館は住んでいる人が地域を発見する場になるし、自費出版、古文書などが地域の研究や防災対策に生きる。
　「ジオパーク」というブランドを手にしたからには、活動を推進していく責任がある。自治体に頼らず、住民にもっと参加してもらい、ネットワーク全体でより高いレベルを目指していきたい。

＜平成24年11月11日（日）高知新聞より＞

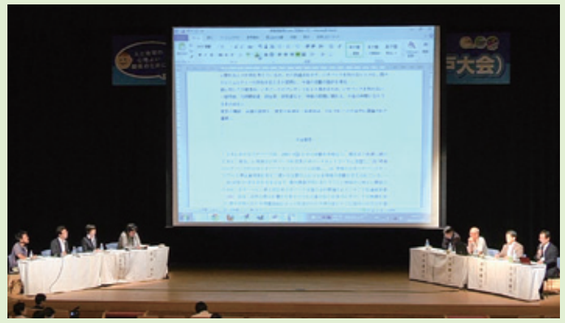
パネルディスカッション（分科会をふまえての総合討論）

［コーディネイター］　目代 邦康氏（公益財団法人自然保護助成基金主任研究員）

パネラー
分科会❶コーディネイター　浅野 敏久氏（広島大学大学院総合科学研究科准教授）
分科会❷コーディネイター　中川 和之氏（時事通信社山形支局長）
分科会❸コーディネイター　宮内 泰介氏（北海道大学大学院文学研究科教授）
分科会❹コーディネイター　迫田 司氏（サコダデザイン代表取締役）
分科会❺コーディネイター　今井 ひろこ氏（特定非営利活動法人たじま海の学校 副代表）

［コーディネイター］
目代 邦康氏
（公益財団法人自然保護助成基金主任研究員）

　本パネルディスカッションでは、大会中の基調講演や分科会などを通して議論された内容を参加者全体で共有し、本大会で得られた共通認識を大会宣言としてまとめた。ステージのスクリーンにワード文章作成画面を映写し、オーガナイザーがパネリストや観客会場から出された意見をその場でパソコンに打ち込むという、臨場感あふれるものとなった。限られた時間での作業ではあったが、参加者みんなで大会宣言を作成するという新たな試みであった。



大会宣言「室戸宣言」

日本におけるジオパークは、2007年よりその活動が本格化し、現在まで発展し続けてきた。現在、5地域のジオパークが世界ジオパークネットワークに加盟し、25地域のジオパークが日本ジオパークネットワークに加盟し、15地域の日本ジオパークネットワーク準会員地域、さらに多くのジオパークを目指す地域があり、様々な分野の人により各地域の活動が支えられている。
2012年11月2日から5日まで、高知県室戸市において、「人と地球の心地よい関係のために」をテーマに、第3回日本ジオパーク全国大会が開催をされた。そこで私たち参加者498名は、自然の恵みが豊かでありつつも災害の多い日本のジオパークの活動を進める上で、真に「心地よい関係」とは何かを考えるために、地球の特徴を学び、地震を伴う隆起によってつくられた大地の姿や、そこに根付いた文化や産業・歴史をジオツアーで体験し、地域住民が主役となるジオパーク活動のあり方と、そこでの“持続可能な発展”とは何かということについてお互いに語り合い、討議を重ねた。
その結果、私たちはここに以下のことを宣言する。

【室戸から学ぶこと・ジオパークの社会的意義】
一. 本大会開催地である室戸は、大地の豊かな恵みをうけ、それを利用しながら人々が暮らしている場所である。一方で、沖合に南海トラフを控え、遠くない将来に巨大地震がこの地を襲う場所でもある。このような自然の災いと恵みの中で実践されている室戸ジオパークの活動から、私たちが学ぶことは多い。人々はジオの中で暮らし、ジオの恵みを受け、文化を育んできた。室戸に集まった私たちは、これらの学びを、各ジオパーク活動に生かさねばならない。私たちは、「変動帯としての日本列島」における大地の恵みに感謝し、自然災害が起こるメカニズムも理解し、科学的な成果を背景にしたジオパークにおける多様な活動を通して、地球とともに生きる新たな社会の実現を目指す。

【三陸ジオパークの支援・防災とジオパーク】
一. 本大会には東日本大震災の被災地から高校生らが参加した。震災被災地の復興のなかで、三陸地方で現在進められているジオパークの活動に対し、私たちはともにジオパークに携わる仲間として、その活動を支援する。そして、私たちは三陸地方の活動から災害とともに暮らす地域の姿を学び、それぞれのジオパークの活動に活かしていく。
私たちは、ここ数年で、東日本大震災、新燃岳噴火、阿蘇の集中豪雨などいくつもの自然災害を経験した。湿潤変動帯に暮らす私たちは、常に、自然災害のリスクにさらされているため、それに備え、うまくつきあっていかなければならない。ジオパークを、災害の記憶を風化させず次世代に伝える場として、また災害情報共有の場として、積極的に活用する。

【地域住民によるジオパークとコミュニケーション】
一. 私たちは、コミュニケーションを重視し、さまざまな工夫によって多様な地域住民の主体的な参加があるジオパークを目指す。ジオパークは、地域の誇り、地域振興、経済発展、環境保全、教育、防災などの地域の課題を複合的に解決していく場になりうる。これまで取り組まれていた地域づくり・まちづくりをベースに、すべての人々が当事者となる、ジオ的な視点を盛り込んだ地域のストーリーを紡ぎ出していく。そして、そのストーリーから新たなサービスを生みだし、そこからよりスムーズなコミュニケーションをつくりだしていく。
また、JGN加盟地域間でネットワークを活かしたコミュニケーションを活性化し、課題解決に向けて共に助けあっていく。私たちは、ジオパークのあるべき姿をコミュニケーションの中で考える。

【保全活動】
一. ジオパークにおける保全活動をすすめるため、調査・研究を推進し、その基盤を整え、継続的に議論をすすめる。
　ジオパークのガイドは、ジオサイトに最も近い場所にいる地域の環境の管理者であり、地域住民や観光客らに、持続可能なジオパーク活動にしていくために、保全活動の重要性を伝えていく役割を果たす。

【ガイドの役割とジオツアーの充実】
一. ジオパークの活動をよりよいものにするために、質の高いガイドの活動とジオツアーの内容の充実を進めて行く。
　ガイドはお互いに交流して、ネットワーク化をはかる。自ら技術の研鑽につとめ、ガイドの数が増えるよう努力し、ガイドの付加価値を高める。ジオパークを訪れる観光客にガイドすることは必要だが、「地域住民」にジオパークを伝えることも大切である。
　日本ジオパークネットワークのつながりを活かし、観光客が各地のジオパークを周遊して楽しめるよう、アイデアを共有して、ジオツアーを組み立てていくことを探求する。

【ネットワーク・交流】
一. この大会には、アジアのジオパークの仲間も参加した。私たちは、質の高いジオパークの活動にするため、国内外の各ジオパークの活動からお互いに学び、相互に研鑽し、連携を深めていく。また、アジア太平洋ジオパークネットワーク（APGN）、世界ジオパークネットワーク（GGN）といった世界のジオパークネットワークとの人的交流、情報交換をすすめ、交流の活発化を推進し、共にジオパークという新しい価値を創造していく。

【ジオパークの将来】
一. 本大会で次世代を担う若者によって出された「日本ジオパーク・高校生宣言」の内容を支持する。ジオパークの活動が、今後持続的に行われていくために、私たちは、次世代とともにジオパークの活動を進めていく。

【本大会総括】
一. 私たちは、地域のあらゆる世代に支えられて実施されたこの大会を通じて、改めてジオパークを楽しみ、人と地球との心地よい関係を笑顔で伝え、地域を一つにすることの大切さを確認した。

2012年11月4日
第3回日本ジオパーク室戸大会実行委員会　委員長　小松幹侍

大会運営の舞台裏

本大会では、地域住民によるさまざまな参加があった。実行委員会は市内の各団体を中心に約50名近くで構成。部会制によるボトムアップの運営を目指した。ジオツアーでは、吉良川小学校の児童によるガイドをはじめ、地域住民ガイドによる熱心な準備が行われた。市内の保育園保育所の園児は、鯨船の模型や室戸の自然や伝統を題材にしたちぎり絵を作成。分科会場に展示した。室戸中学校・室戸高校・室戸吹奏楽団による吹奏楽アトラクションでは、室戸ジオパークをテーマにしたオリジナル曲“MUROTO as the Earth～大地と生命の躍動～”の初演があった。これら地域住民の尽力によって本大会は支えられた。（参照：高知新聞記事）

■室戸市内の保育園保育所の園児の作品

■平成24年10月29日（月）高知新聞

「ジオパーク学」の野外実習で学ぶ室戸高生たち（室戸市の室戸岬）

大地がつなぐ 上

日本ジオパーク室戸大会・11月2～5日

ジオ熱 室戸の思い伝えたい

■平成24年10月30日（火）高知新聞

ジオツアー本番に向け、自主練習に励むガイド（室戸市の室戸岬）

大地がつなぐ 中

日本ジオパーク室戸大会・11月2～5日

発信 「すごいガイド」たち

■平成24年10月31日（水）高知新聞

大地がつなぐ 下

日本ジオパーク室戸大会・11月2～5日

主役たち 市民結束で一歩前へ

ジオ全国大会を前に地域の清掃に汗を流す市民（室戸市元甲）